＜抜刷り＞

富士見市立資料館調査研究報告

第２号

富士見市立考古館開館 50 周年記念号

2024.12.28

埼玉県 富士見市立資料館

講演記録	荒井幹夫	無我夢中 －考古館創成期－
★講演記録	会田明	市民の好奇心が考古館を変えた
回想	和田雅子	とにかく熱かった
論文	和田晋治	縄文中期勝坂式期の猪装飾付土器
論文	早坂廣人	花積下層～関山式土器について
事例報告	駒木敦子	公民館で「社会教育施設の専門職」について考えた
研究ノート	山野健一	石鳥居が伝える江戸と鶴馬の結びつき
研究ノート	田ノ上和宏	入間ごぼうに関する調査と考察
資料紹介	佐藤一也	上内手遺跡第 10 地点出土の陶磁器
資料紹介	高橋宏之	南通遺跡出土の下小野系土器について
資料紹介	大野朝日	新田遺跡第 1 号住居跡について
資料紹介	齋藤麻那	打越遺跡出土の押出型石匙について
資料紹介	菅沼慎太郎	南通遺跡近世墓坑と出土銭貨

※1　本文中の執筆者の肩書きは 2024 年 3 月 31 日時点です

※2　見開きの左側に偶数ページがくると見やすいように編集しています
両面印刷する場合はこのページごと印刷することをおすすめします
2 ページずつ印刷する場合はこのページを飛ばして印刷してください

※3　抜刷り共通の表紙です。該当する記事に★を付けています

＜講演記録＞

市民の好奇心が考古館を変えた

会田明（元難波田城資料館長、前資料館友の会会長）
コメント 和田雅子、塩入たま江

司会）予定の時刻となりましたので、企画展「ひらいた 考古館」の関連講演会を始めます。

講師は、難波田城資料館の元館長でもあり、かつ資料館友の会の前会長でもあるという二つの立場から、考古館の普及事業のあゆみ、その初期の頃からご存じの会田明さんにお願いしました。それではよろしくお願いいたします。

1.略歴

はい、よろしくお願いします。

私は昭和 49 年に富士見市で働き始めて、最初、発掘調査の方を担当しておりまして、 5 年ぐらいやった後、後輩の職員も入ってきたので、私は現場の方を離れまして、いわゆる教育普及事業と言いますか、そちらの方に専従になりました。

ざっと、その後の話をしますと、 1 年だけ、昭和 61 年度、社会教育課に所属し、市民大学の自然部門を担当しました。それまで遺跡と関係深い湧き水のことはある程度知識があったので、受講者と一緒に市内の湧き水を探して、水温とか水量とか ph（ペーハー）、導電率（電気の流れやすさ）、そういうデータを取ったりしました。それは 1 年だけだったんですけども。

62 年からは、市史編さん係に異動になりました。途中からでしたけど、最後に通史編が出た平成 6 年度まで、8 年いました。

その後、教育委員会の事務局の方で、文化財もやりましたけども、途中からは人権問題とか、文化財以外の担当をしました。

そして、難波田城公園・資料館がオープンした翌年、綺麗になったところへ異動してきて、ここで 6 年、館長という立場でした。

そこからまた教育委員会の方に戻りまして、その後、退職前の最後の年は水谷公民館の館長でした。その最後の年、東日本大震災がありました。公民館としては揺れはしましたが、ホールのシャンデリアの部品がちょっと落ちてきた程度でした。ただ、もう夕方から車がすごい渋滞しまして、その後、皆さんご記憶だと…。ガソリンも無くなっちゃうということで、すごいガソリンスタンドへ渋滞が続きましたが、そんな時が退職の時です。

実は、正式採用になった昭和 50 年の時も、48 年に起こったオイルショックの余波がありまして、4 月採用の予定が 5 か月遅れて 9 月採用となりました。出る年も、入る年も、大きな問題があったということで印象が残っています。

退職後は 2 年間、再任用職員として、この資料館で主に写真資料の整理を担当しました。

2.普及担当となるまで

入職から最初の 5 年ぐらいは発掘の方の現場で、個人の住宅とか、それから小学校とか中学校とか、その発掘調査をおこなっていました。

後輩の職員が二人入ってきましたので、現場の方は後輩に任せ、私は教育普及事業担当と、合わせて民具整理っていう、民俗資料の整理担当もおこなっておりました。

で、教育普及事業担当となって、特に拓本と土器作りに力を入れました。

3.土器作り

土器づくりの方は、針ヶ谷地区の区画整理による遺跡の発掘調査をしていましたが、調査を終えて工事が始まった、切り通しのところから、

良質な粘土が出てきました。これを使って土器を作ったらどうかということで、土器づくり教室を始めてみました。

ちょうど発掘調査の現場に来ておりました高校の先生に、熱心な先生だったので、市民の方々と一緒に土器づくりの教室を開いたらどうでしょうかということで相談しまして、活動の中心となることを引き受けていただきました。

1982 年自然観察会（針ケ谷切り通し）

4. 拓本講習会

拓本の事業は 文化財審議会委員をしていた先生（伊藤正和氏）が詳しいっていうことで、その先生にお願いしまして、石造物、特に第 1 回は板碑ですね、板碑の調査とか、それから、それを記録する拓本って言いまして、文字、そこに彫られている文字や絵柄を紙に写し取る、そういった事業を行いました。

で、拓本の方はですね、私が直接担当しまして、その郷土史家の方にお願いして一緒に調査を行ったり拓本を取ったりしておりました。

この写真、水子の大応寺さんですね。本堂の脇で拓本を取ってるところです。昭和 55 年でしたね。1 日目は先生のお話で、2 日目が拓本の体験という、2 日間の事業でした。

翌年、先生の方からですね、富士見市にはたくさんの石造文化財って言いますかね、石碑、お地蔵さんとか、馬頭観音とかあるんですけども、そういったものに彫られている文字を記録してはどうか、という提案がありまして、講座に引き続き、受講者の方と一緒に拓本による庚申塔の記録活動というのを始めました。

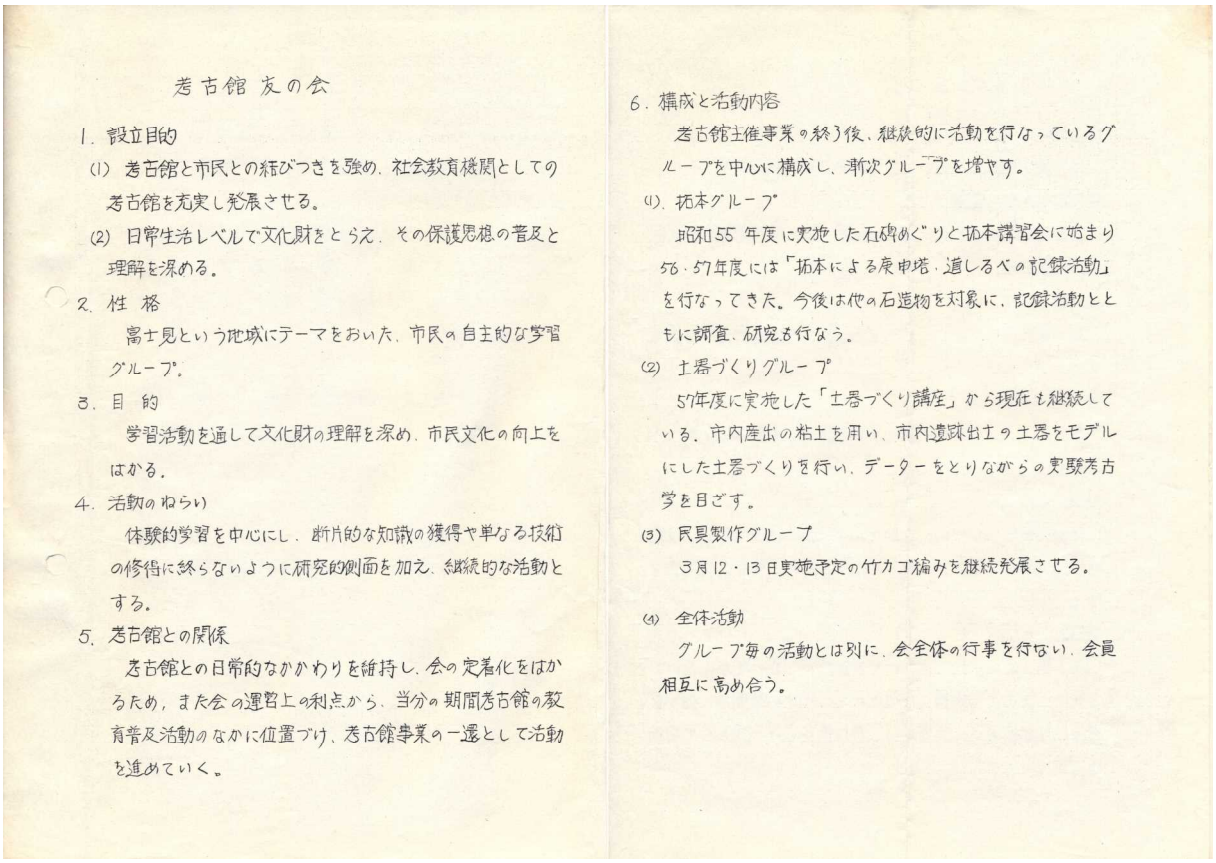
庚申塔というのは、全部で市内に 40 基ぐらいあるんですけども、そこを受講者の方と一緒に訪ね歩いて、ちょっと離れているところは自転車で回ったりして、そして石に彫られた文字を記録するという、そういう活動を 2 年ぐらいかかりましたね。それが終わってから、次に馬頭観音、それから、弁財天とかそういったものを同じような手法で調査しました。

5. 友の会の結成

実は、普及担当になった時に、友の会の組織を作れという館長からの指示がありました。しかし、具体的なイメージもなく、どうしたものかと思っておりました。

そうこうするうちに、拓本を取るサークルと土器作り、2 つのサークルで活動が始まりましたが、こういった方たちを核として友の会にしてはどうかなと思いつきました。この設立案（次ページ）に、友の会活動の骨子、こういった計画を立てまして、これでやってよろしいと館長の了解をいただき友の会を立ち上げました。

それが昭和 57 年度の最後、58 年の 3 月に、事業発表会というのと合わせまして、友の会の立ち上げを行いました。この写真は、事業発表会で、拓本の成果を発表している場面です。



考古館 友の会

1. 設立目的

(1) 考古館と市民との結びつきを強め、社会教育機関としての考古館を充実し発展させる。

(2) 日常生活レベルで文化財をとらえ、その保護思想の普及と理解を深める。

2. 性格

富士見という地域にテーマをおいた、市民の自主的な学習グループ。

3. 目的

学習活動を通して文化財の理解を深め、市民文化の向上をはかる。

4. 活動のねらい

体験的学習を中心にし、断片的な知識の獲得や単なる技術の修得に終らないように研究的側面を加え、継続的な活動とする。

5. 考古館との関係

考古館との日常的なかかわりを維持し、会の定着化をはかるため、また会の運営上の利点から、当分の期間考古館の教育普及活動のなかに位置づけ、考古館事業の一環として活動を進めていく。

6. 構成と活動内容

考古館主催事業の終了後、継続的に活動を行なっているグループを中心に構成し、漸次グループを増やす。

(1). 拓本グループ

昭和55年度に実施した石碑めぐりと拓本講習会に始まり56・57年度には「拓本による庚申塔・道しるべの記録活動」を行なってきた。今後は他の石造物を対象に、記録活動とともに調査・研究も行なう。

(2) 土器づくりグループ

57年度に実施した「土器づくり講座」から現在も継続している。市内産出の粘土を用い、市内遺跡出土の土器をモデルにした土器づくりを行い、データーをとりながらの実験考古学を目ざす。

(3) 民具製作グループ

3月12・13日実施予定の竹カゴ編みを継続発展させる。

(4) 全体活動

グループ毎の活動とは別に、会全体の行事を行ない、会員相互に高め合う。

友の会設立案（昭和 59=1984 年 3 月頃）

会場は南畑公民館でした。考古館は、展示室、学芸室、収蔵庫とありましたけども、いろんな講座とかできる場所はなかったんです。考古館が建っていたのが南畑公民館の敷地でしたので、10 歩ぐらいしか離れていない南畑公民館で、色々と講座とかを開いておりました。

友の会ができたといっても、まだ友の会自体が考古館の主催事業の 1 つで、団体育成っていいますかね、軌道に乗るまでの間、職員が一緒に活動をすると、そういった形が数年続きます。

拓本部会の冊子

6. 拓本部会

その間にも、拓本の方は、いろんな調査を行って、その都度、冊子を作ってきました。特に 1 番左、道しるべをまとめたものです。石造物を調査してますと、道しるべを兼ねたものがありまして、これはこれだけ集めてみたら面白いんじゃないかということで、市内だけではあまり数がないので、富士見市に通じる、あるいはこの近辺のですね、石塔、道しるべもまとめて調査しました。これは三芳町のお寺のところにあります庚申塔で、これも道しるべを兼ねてたのかなと思いますけども、富士見市の近辺、遠くは新座とか朝霞の方まで、それから大宮の指扇、所沢の方とか、自転車で行ける範囲で、調査を行っております。

7. 土器作り部会

一方、土器づくりの方は、土器づくり部会として定着してきまして、自分たちの作品づくりをし、また、考古館主催の土器づくり教室など

では講師の立場で協力するという関係ができてきました。拓本の方も同じで、拓本講習会のときは、友の会の会員が講師になって指導をするというスタイルが出来上がりまして、それは今でもずっと続いております。

土器づくりの方も、皆さん上手になりまして、こうやって本物の土器を見て作るんですけど、ただ形だけ真似して作るんじゃなくて、どこのどういう風な土を使っているのか、それから焼き方はどうなのかとか、色んな研究しながら土器づくりを行っていました。粘土を採集してきましたらば、粘土を乾燥させて、それを細かく砕いて粉状にして、それをふるいにかけたりして、それからまた砂とか赤土とか混ぜて、一応、土器の作れる粘土作り、そこから始めております。それから、焼く時も、いきなり火の中に入れてしまうと割れてしまいますので、色々工夫しながらです。

粘土の粉砕

土器の焼成

最初の頃は、千葉市にあります加曽利貝塚という縄文時代の貝塚に、早くから土器づくりのサークルがありますので、そこの方に講師としてお越しいただいて指導いただきました。

そうこうするうちに皆さん上手になりまして、こんな形で立派な縄文土器が作れるようになっております。焼くのは、なかなか場所がなかったものですから、考古館の裏手に新河岸川が流れておりますけど、その土手を降りたところ、川との間に少し平らなとこあるんですけども、そこを使わせてもらって、水子貝塚の公園ができるまではそこで焼いていました。

8. ワタの栽培

そういう風に、主に土器づくりとか拓本の方に関わっておりましたけども、古い民具、農具とか、機織りの道具とかも集めておりまして、その時に使い方がわからない道具もあったり、あるいは分かっても、それをただモノで残すんじゃなくて、それは何に使ったのかとか、どうやって使うのかとかですね、そういったことも調べながら記録を残した方がいいんじゃないかと思っていました。特に機織りの道具がたくさんありました関係で、ワタの種を、たまたま新聞の記事でワタの種をプレゼントしますという記事がありまして、それに申し込んだら、8粒、ほんのちょっとですけども、封筒に入ったものが送られてきました。それを播いてみてですね、春、播いても、実がなるのは秋なんですけど、思った以上に綿花ができたので感動しました。

翌年はワタの種を多めに購入しまして、そして、ちょうどここの、難波田城が整備される前、市有地の一角に畑を作って、本格的にワタの栽培を始めました。で、事業の方も「ワタの栽培から機織りへ」ということで栽培して機を織るところまで一緒に体験しようと始めました。

綿繰り

綿花を採ったら、それから綿繰りの作業、この昔の洗濯機の絞るところみたいな形で、ローラーの隙間から綿と種とを通すと分かれて出るって、こういった道具ですけども、 こういったものを使いながらやっております。

機織りは難しい場面もありますし、道具も必要なので、すぐにはできませんでしたが、なんとか、綿から糸を紡ぎ、布を織るところまで、たどり着きました。

9. 竹かご作り

あとは竹かごですかね。市内に竹かごを作る職人さんがいらっしゃいまして、最初、昭和 58 年に企画した時は 2 日間でやる予定でしたけど、2 日目、ちょっと講師の都合で中止になってしまって、そこから何年かあいちゃったんですけども、市内にほかにも竹かご職人のがいらっしゃいまして、その方の指導を受けて、竹かご作りの事業が本格的に始まりました。

10. 友の会の拡大

そういった事業から出発して、機織りの方は、木綿部会という 1 つの部会に成長しました。竹かごの方も、竹かご教室からサークルができて、友の会に加入して竹かご部会。その他に難波田城公園ができてから市民学芸員さんの有志を中心に作られた、ふるさと探訪部会もあります。今は土器づくりは水子貝塚の方が拠点になっておりまして、難波田城で 4 つの部会、合わせて 5 部会が、友の会の活動をしております。

この間に、一時期、一般部会って言うどこの部会にも属さない、逆にどの部会にも参加できるような、そういった一般会員による部会もできております。その後、見手歩好（みてあるこう）部会と名前を変えて、各地を見学に行く、そういった活動をしていた部会もありました。

11. 友の会の確立

先ほど言いましたように、友の会と言っても、初めは資料館の事業の一つで、独自に活動とかできていなかったものですから、そろそろ自立してはどうかということで、昭和 62 年の 5 月に第 1 回総会を開催しました。この時は会則を決めたり、役員を決めたり、それから予算等を決めて会費を徴収したりとか、組織として自立するのに必要なことをこの総会で決めました。現在は会員が 50 数人いるんですが、当時は 26 名、半分ぐらいでした。

もちろんそれからも、考古館は、こういう団体の育成とか、いろんな形で協働関係がありますので、深い関わりを持ちながら進んできておりまして、全く手を離れたということではありません。むしろ、ずっと結びつきを持った活動を続けております。特にその中の一つに、作品展というのがあります。

12. 合同作品展

ちょっと戻りますけど、昭和 60 年の 4 月、第 1 回合同作品展を開きました。この合同っていうのは、考古館と友の会との合同という意味合いがあります。

第 1 回目の写真が下の方にあります。

この時は、まだ部会が 2 つしかありませんので、土器と拓本。この手作りのポスターなんです。この頃、職員の中で、こういったポスター作りが得意な職員がおりまして、友の会の方と協力をしながら、シルクスクリーンという手法で作っております。

会場は、サンライトホールって、鶴瀬駅西口駅ビルの 1 階の奥の方、三つあった会議室を繋げて、広い会場ができるんですけども、そこで作品展を行っておりました。作品を考古館のトラックとかで運んでもらったり、どうしても友の会の会員だけではできなかったということで、合同ということで行っておりました。この会場が、2 日間限定しか借りられなかったのか、いつも、土日、土日でやってきております。

作品展は、作品を作るのが、この友の会の目的ではなくて、作りながらいろんなことを、昔の生活とかを研究するとか学習するとかで、作品は手段にすぎないということをスタンスにやっておりますので、毎年開くのは大変なので、基本的には隔年、1 年おきにやっております。大体は年度末に行っておりました。

昭和 63 年の第 2 回になりますと、土器と拓本のほかに木綿、先ほど言った機織りのサークルが、部会となる直前で、一緒に作品展に参加しています。次の第 3 回の時には、竹かごも参加し、4 つの部会が作品を持ち寄って作品展を行っております。

で、考古館の方も、考古館の事業に参加していただいた市民の方の作品も合わせて展示しておりました。

これで基本的な形が出来上がって、あとは、回数を重ねてきております。

平成 12 年に難波田城資料館がオープンしまして、こちらの特別展示室で、サンライトに比べれば狭いんですけども、作品展を開くようになりました。ただ、12 回から 13 回までの間に 9 年ぐらい、開いております。平成 23 年 5 月に第 13 回を予定していましたが、3 月に東日本大震災があり、その影響でいろんな事業が中止になったり自粛したりいうこともありまして、作品展の方も一端、中断してしまったんです。

昨年の 10 月に 40 周年記念第 15 回友の会合同作品展がひらかれました。

資料に「作品展は、友の会の活動成果の発表の場であり、友の会と考古館が共同で作り上げる 1 つの作品でもありました。40 年続く活動の励みにもなってきました」とあります。やはり作品展があるので、これを目標にある意味こう頑張ってきたりとか、その成果を喜んだりとか、そういった良いアクセントになってきたかなと思います。

13. 友の会だより

で、第一回総会の時に「友の会だより」も作ろうということが決まりまして、最初は B5 版の全 4 ページ、B4 用紙を 2 つに折って 4 ページだてになっております。内容としては、友の会のこととか全体のこととか、それから各部会の活動状況報告と、そういった内容になっております。で、創刊号ですので、会長の挨拶とか、それから館長の挨拶をいただいております。

平成 23 年 3 月 31 日第 30 号で休刊ということで、現在発刊しておりませんが、いろんな友の会のニュース的なこと、それから友の会だけじゃなく、市民学芸員のこととかいろんな動きをお知らせしておりました。当時を振り返るいい資料になっております。

14.会員研修

友の会は各部会に分かれておりますので、全体の事業が少ないんですね。で、全体でやるのは作品展とか、それから会議、総会とかぐらいしかないんですけども、やはり会員の資質の向上も含めまして研修が必要でしょうということで始まりました。

春と秋に行っておりまして、春っていうのは総会が終わった後の午後、近隣の博物館等に出かけて見学を行っております。で、そのパターンがずっと、難波田城資料館ができる直前まで続いておりました。

秋の方は、県外の博物館等の研修ということで、市が持っていたバス、あるいは借り上げたバスを使いまして、一般の市民の方と一緒に、バス研修を行っておりました。考古館と共催という形で行っておりました。

15.水子貝塚公園

難波田城の方が、拠点にしてる部会が多いので、どうしても水子貝塚の印象が薄くなっちゃってんですけども、平成6年6月に水子貝塚公園がオープンしました。オープン直後は、公園の隣に簡単なプレハブの建物がありました。そこに職員が通いながら管理していたんです。で、平成 10 年に 現在の施設ができてからは そっくり考古館が移転しまして、水子貝塚の中に考古館ができたと。講座室（体験学習室）もありますので、土器づくり部会の方はそこを拠点に活動しています。土器を焼くのもね、新河岸川の河川敷でやってたのが公園の中でできるようになりました。

で、水子貝塚まつり、星空シアターというのが今でも続いておりますけども、平成8年に第1 回の星空シアター が開かれております。毎年9月の第1土曜日に行っていますけど、実行委員会形式でやっておりますので、地元からまちづくりの団体とか、幼稚園とか保育園とか商店会が、メインの実行委員会なんですけども、その中に資料館友の会も、実行委員として加わっております。シアターの中では、まが玉づくりという体験を担当しております。また、模擬店を出店したこともありました。シアターは今でも続いておりますけども、この出店の方は 1 回か2回だったかなと思います。

16.友の会リーフレット作成

それから、友の会を紹介するリーフレットを作りました。これは実物ですけれど A4 を三つ折りにしたものです。キーワードが「あなたも輪ん中へ」ということで、輪の中に入って一緒に活動しませんかという、こういったリーフレットを作りました。考古館の職員が編集して、今でもちょっとデザイン等は変わっておりますが、意味合いとしては変わっておりません。友の会の各部会の簡単な紹介とそれから全体活動の紹介、そんなリーフレットを作りました。

17.市民学芸員制度の実現に貢献

そして、富士見市の特徴である市民学芸員っていう制度。今日もお越しになっていらっしゃるかと思いますけども、市と協働でいろんな活動をする。主に水子貝塚公園や難波田城公園のガイドを行うということで、そのために講座を受講していただき、その後に、市民学芸員として登録していただき、ガイドとかいろんな資料館のお手伝いをしていただくという、そういう制度ができました。

この難波田城公園を整備する時に、整備検討委員会の委員に友の会会長も委嘱されまして、そして友の会の立場でいろんな意見をしてきております。市の方から「こういう制度を考えている」という話があった時に、友の会側も、自分たちが色々体験してきたこと、また個人的に経験してきたことを、広く伝えていくという場がなかったもんですから、そういった市民学芸員という制度は、友の会にとっても有意義なことであろうということで、友の会の中に検討委員会を作り、色んな先進事例の研究とか見学などをしました。その結果、市民学芸員ができた

暁には是非友の会も参画していきたい、そのような制度を整えて欲しいと要望しました。

市と友の会と共通の意思確認ができまして、それが大きな力となって、市民学芸員制度は実現したということです。

ですから、最初の頃は市民学芸員の半分ぐらいが友の会の会員だったと思います。

18.難波田城公園・資料館オープン

ここの旧金子家の前の広場で、 平成 12 年の 6 月 1 日に難波田城公園・資料館の開園記念式典を行いました。その前に考古館が水子貝塚公園に移転していて、難波田城公園の開園と同時に水子貝塚資料館と呼び名が変わりました。これで、2 館体制となりました。

その際、友の会も二つに分かれたらどうかということもあったんですけども、水子貝塚を拠点とするのは土器づくり部会だけで、難波田城は 3 つの部会で、バランスもよくないということもありまして、結局一つでやっております。

19.埼玉県文化ともしび賞

平成 15 年 10 月、「埼玉県文化ともしび賞」を受賞しました。こちらは、地道に地域の文化向上のために、地域文化の向上のために貢献している個人とか団体を顕彰する、そういった賞なんですけども、こちらを受賞しております。

市内の方、個人でこのともしび賞を受賞されてる方もいらっしゃいますし、何件かあるんですけども、そのうちの 1 つとして文化ともしび賞を受賞しました。で、表彰状はこの館内に展示してあるかと思います。

20.まなびビア埼玉 2009

平成 21 年 10 月 30 日から 11 月 3 日まで、第 21 回全国生涯学習フェスティバル「まなびビア埼玉 2009」が埼玉スーパーアリーナを主会場に開催されました。あと、県内各地で行っておりますけども、スーパーアリーナの会場には各市町村ごと、1 つの展示ブースを作っていただいておりまして、生涯学習の見本市のコーナーという形で、各市町村で色々と出し物がありました。富士見市では、資料館友の会と市民学芸員の活動を、写真やパネルで紹介する。そして、友の会の方は綿繰り機を持っていきまして綿繰りの体験等をやっております。市町村によっては単なる観光 PR の場所としてパンフレット置いただけ、そんなところもありましたが、富士見市の場合は、純粋に生涯学習の展示、特に体験学習をしていただきました。

この「まなびピア」は、全国持ち回りで行っていて、この年は埼玉が会場ということでしたが、現在は無くなってしまっているようです。

21.和島誠一賞

昨年 6 月 25 日、文化財保存全国協議会、略称「文全協」より「和島誠一賞」を受賞しました。文全協は、日本に残された豊かな文化財を守り、学び、正しく活用して後世に伝えていくことを目的としている団体で、遺跡保存に大きな貢献をした和島誠一にちなんで、文化財の保存・活用に貢献した個人・団体に賞を授けています。友の会の 40 年にわたる地道な活動が評価され受賞しました。京都の方で授賞式がありまして、友の会会長が出席しております。

22.記念誌と図録

友の会が昭和 58 年に誕生して、昨年 40 周年ということで、記念の冊子も作っております。『資料館友の会結成 40 周年記念誌』。こちらですね。今日の資料もここからコピーしています。たまたま 10 年違いで、考古館がそれより 10 年早く、昭和 48 年に開館しておりまして、こちらは 50 周年ということで、今、展示していますけれど、この図録もできています。大変よくまとまっておりまして、私もここでお話するとき大変参考にさせてもらっております。ただ、できたのはほんの数日前で、十分に見てなかったんで、早くこれ知っていればよかったなということです。

2 つの冊子を合わせて見ていただくと、友の会のこともだいぶ書いてありますのでよくわかるかなと思います。

以上、ちょっとそれぞれ簡単ですけども、40 年間、主だった出来事をまとました。

コメント

司会）ありがとうございました。時間を気にしていただいて、質疑の時間が残るようにまとめていただきました。

お話を聞いていると、するすると、どんどんうまくいったように聞こえるかもしれませんが、打ち合わせの時に、実は、土器部会と拓本部会を立ち上げた時は、もう毎週日曜日のたびにどちらかの部会の活動を手伝わないといけなくて、全然休めなかったから相当大変だったという話も聞いております。

ここで、少し違ったアングルからコメントをいただければと思いまして、まず、会田さんのあとを受け継ぐように、木綿部会と竹かご部会の立ち上げをされた和田雅子さんが見えていますので、少しお話しいただければと思います。

【和田雅子】　和田と申します。私、昭和 59 年度に考古館に異動になりまして、2 年間、会田さんに民具整理とか教育普及事業の方をご指導いただいて、一緒にやらせていただきました。

今見ていただいても素敵な会田さんなんですけども、当時 30 代だった会田さんはさらに素敵で、富士見のアランドロンとか言われて、隠れファンがいたんですけど、ある日、出勤されて、足元を見たら、右と左の靴下が違うのを履いていて「それで電車で来たんですか」って、そんなこともありました。

さきほど、8 粒の綿の種を取り寄せたっていうお話しがありましたけど、考古館の事務室のベランダとかいろんなところにまいて、本当にこれくらい取れたんですね、綿がね。で、学校に保存してあった綿繰り機を持ってきて、それで「やってみよう」ってやった時に、もうなんかギーギーギーギ、音がしちゃって、大丈夫かなと思って、なんだかんだやったら、ちゃんと、ワタと種が分離できて「いけるんじゃないの、これ」みたいな話から、「じゃあ翌年度は市民を巻き込んでやってみようよっ」てなりました。

市有地を開墾するところから、近くの方にご指導いただいて、雑草取りとか、本当に毎回大変な思いをしたんですけど、秋にはすごいワタがいっぱいとれて、綿繰り機とかもどんどんこう、民具から道具になっていく。そういうことを繰り返してやっとこう活動に繋がった。

で、さっきありましたけど、会田さんは毎週のように友の会の活動をされていて、タイトルにあるように「市民の好奇心が考古館を変えた」って本当にそうだなと思って。その頃、職員も必死だったんですけど、市民の方のエネルギーの方がすごくて。友の会の作品展で、たった 2 日なのに、もうみんなすごい準備に時間かけていいものを展示しようって頑張っていて、その頃のことがずっと今に繋がってるんじゃないかなっていう風に私は思っています。友の会の皆さんのすごいエネルギーが今に生きてるんだなと。その分、本当に職員も必死で、夜の会議、日曜日、そういうのをね、一緒にやらせていただくんだけど、それ以上に市民の方が熱心だったっていうことが 言えるんじゃないかなと思います。

司会）ありがとうございました。それでは、活動されてきた市民の方からということで、今日、皆さんにご覧いただけるように、友の会の作品展のアルバムをお持ちくださいました、拓本部会の塩入さん、いかがでしょうか。当時、どういった思いで活動されていたか…

【塩入たま江】　私、会田さんがお話した活動、全部参加してきました。40 年ですね。最初、拓本と土器づくりの体験に参加して、その後、富士見市はいろんな文化財があるんだっていうことがわかったので何人かの拓本のグルー

プで、朝の5時6時頃から、皆さん、自転車に乗って、富士見市を回って、拓本を取っていった。ここにこういうものがあるんだっていうのを、ちゃんと記録として残そうって。 それで、まだ、子供たちも小学校の低学年でしたので、写真にも載っていると思いますけど、子供を連れて活動してる。あとですね、ほとんど毎週活動している。私も1番最初、土器グループの体験コースにも入って、土器の方と拓本とどっちにしようかなと思った時に、拓本の方を選んだんです。それがずっと今まで続いて…。拓本部会に最初から入って、今まで活動しています。いま6人ですが、最初から皆さん一緒に活動しています。

それとですね、「水子貝塚まつり」の時、ここの写真にも出ていますけれど、チヂミ。そのころは全然皆さんチヂミを知らなかった。韓国の方に教えてもらって、「チヂミって、こうだよ」って言って、それを皆で何回か作って、それで、水子貝塚の星空シアターの時に、美味しい美味しいって食べていただきました。

あと「友の会だより」。これも最初から関わって、編集委員は会長と、あと何人か、3人か4人でやっていて、いただいた原稿を打ち込む作業がありました。最後に残ったのが私1人になってですね。で、30 号で一応、終わったんですけど、この時はいろんな部会からの記事をいただきました。そういう思い出もあります。

合同作品展って、最初の西口サンライトホール、あそこは広かったんですね。で、皆さん、土器部会と、拓本部会ですけど、結構作品たくさんお持ちいただいて、見学して下さる方は本当に大勢来ていただきました。

その間の歩みっていうのも、この通りにずっと 40 年間やりました。市民学芸員には私も入って 20 年間、活動しました。一応、卒業じゃないけどやめさせていただきまして、今「難波田城いきものがかり」っていうのがありますので、そちらの方に移動いたしました。でも、40年、本当によく続いたなって、思っております。

会場からの質問

司会）ありがとうございました。会場の皆さんからも、質問を受け付けたいと思いますけれど、いかがでしょうか

質問）長い間どうもご苦労様でした。歴史を聞いた思いです。あの庚申塔ですけれども、市内の40基の拓本はすべて採ったのですか？

会田）庚申塔ですね。元になる資料は、郷土史家の方が調べて、本にもなって、一覧表があったんですけども、ただ、活字ですので、誤植って言いますかね、間違っていることもありますので、拓本であればですね、本物と同じものが写されて、確実に記録として残ると。ただ、こういう文字だけのものと、立体的な像が彫ってあるのもあります。拓本は文字の部分だけは大体基本にですね、残してあります。今、ファイルにまとめてありまして、クリアファイルみたいなやつで、保存上はあまり良くないと思うんですけども、ゆくゆくは整理して、資料館の方に富士見市の歴史資料として寄贈したいなと思っています。

司会）道端にあったはずの石造物がいつの間にかなくなっているようなこともございます。そういった時、拓本というのが非常に貴重な記録としてずっと残っていくのだと思います。

ほかにいかがでしょうか。貴重な機会ですので、もしあれば …。

それでは、貴重なお話をいただきました会田さんに、もう一度拍手をお願いいたします。

以上をもちまして、お開きとさせていただきます。御参加ありがとうございました。

本稿は、令和6年3月16日に難波田城資料館を会場として開催された、企画展関連講演会「市民の好奇心が考古館を変えた」の記録である。

講演原稿とテープ起こしに基づいてまとめ、講演中に映写した写真の一部を挿入した。